

# サバティカル研修報告Ⅱ

## —オーストラリアの高校教育—

磯部 達彦

### 1. はじめに

平成 25 年 4 月より 1 年間、サバティカル研修制度を利用して、フィンランド、オーストラリア、ニュージーランドの 3 か国の高校で授業をする機会をもつことができた。本稿は No. 75 に掲載されたフィンランド編の続編で、平成 25 年 11 月 8 日から翌 26 年 2 月 28 日まで 4 か月、オーストラリアで行った研修について報告する。オーストラリアでは、日本語の授業に ALT として参加し、日本の歴史や文化を紹介する授業を行い、英語(母語)教育と日本では行われていない科目(演劇など)を観察した。

### 2. 研修地と研修実施校

#### (1) ブリスベン(Brisbane)の教育制度

ブリスベンはクイーンズランド州の州都で、オーストラリア第 3 の都市である。ここでは、4 学期制がとられており、10～12 月が第 4 学期、1～4 月が第 1 学期となる。primary school は 5 歳児から 7 年間(Year 1～7)、secondary school が 3 年間(Year 8～10)、義務教育はここまでで、その上に senior secondary school が 2 年間(Year 11, 12)ある。2015 年度からこの 7・3・2 制が 6・4・2 制に変更され、primary school に通っている Year 7 の生徒は secondary school に通うことになる。そのため、secondary school では 1 学年分の増員に備え、校舎の増築・建て替えや教室の引っ越しが行われていた。

#### (2) 2 つの研修校

研修校は Mount Alvernia College(<http://www.mta.qld.edu.au/>) と Hillbrook Anglican School(<http://www.hillbrook.qld.edu.au/>) の 2 校で、月・火・金曜日は Mt Alvernia 校、水・木曜日は Hillbrook 校で研修することになった。college は中高一貫校を指し、両校とも Year 8～12 の生

徒が通う college である。

Mt Alvernia 校は、フランシスコ修道会によって設立された女子校で、校内のいたるところにキリスト教主義の教えが見られた。同じくフランシスコ修道会設立の男子校 Padua College(<http://www.padua.qld.edu.au/>)が隣接しており、演劇活動やオーケストラ活動などは Padua 校と合同で行い、卒業式典の一部も Padua 校の校舎を借りて行われていた。

Hillbrook 校は男女共学の英国国教会による学校である。カソリックの Mt Alvernia 校との違いは、信仰だけでなく、'In Balance We Grow' という学校のモットーにもある。この学校のカリキュラムは、ハーバード大学教授の Howard Gardner 氏が提唱する Multiple Intelligences モデルに基づいており、知能を IQ テストだけでは測れない複合的な力ととらえ、学校教育にも野外活動を含むさまざまな活動をバランスよく盛り込んでいた。

### 3. 研修内容 I (第 4 学期 11～12 月)

#### (1) 研修初日と時間割

Mt Alvernia 校の初日、朝一番に Kerrie 校長先生にお会いし、その後、教員室で先生方と顔合わせをした。8:20 から教員のミーティングがあり、8:30 からは SHR で生徒の出席点呼を行う。クラス編成は学年縦割りで、1 クラスは 20 名程度、教室だけでなくホールや中庭に集合しているクラスもある。8:55 から 1 限目が始まる。授業時間は 40 分で休憩時間は 10 分となっているが、授業の延長はよくあることだった。10:35 から 20 分間は morning tea の時間があり、先生たちも教員用の休憩室で軽食をとり、入れたてのコーヒーを飲む。

この日、私は 1 限目に Victoria 先生が担当する Year 10 の「日本語」の授業に ALT として参加し、2 限目は Karen 先生の「英語」の授業を参観した。

morning tea のあと、11:00 からの 3 限目は Victoria 先生の Year 11 の「日本語」で、4 限目は授業の打ち合わせを済ませてから、Karen 先生の study of society を観察した。

12:40 からは 40 分間の昼食時間になる。生徒は昼食を持参してもよいし、tuck shop (購買部) で購入することもできる。tuck shop では、朝のうちに昼食をメニューから選んで予約しておく、午前中に調理してくれる。5 限目は 13:25 から始まり、Year 9 の「日本語」に参加した。6 限目は体育館を兼ねたホールで、全校集会があった。この場で、Kerrie 校長先生より生徒全員に紹介してもらい、生徒代表の 2 人から挨拶を受けた。6 限目終了後は校内放送が入り、一日の反省とお祈りの時間があった。生徒は下校になり、15:15 から教員会議が始まった。初日から忙しい日だったが、Mt Alvernia 校では、ほぼこれと同じペースの生活が続いた。

Hillbrook 校では、初出勤日の前日に学校で Jeff 校長先生とお会いし、「日本語」担当の Margaret 先生に校内を案内してもらった。この学校には教員用の保育所があり、ここに子どもを預けて勤務している先生もいた。

この学校での授業時間は 80 分で、1 限目終了後に 20 分の morning tea があり、2・3 限目は 10 分の休憩を挟んで続き、昼食は 13:20 から 40 分間、14:00 に 4 時間目が始まり、その後下校となる。

## (2) Mt Alvernia 校のボランティア活動

生徒たちが放課後ダウンタウンにある公園に出かけ、ホームレスの人々に無償で食事やコーヒー、紅茶、ミロなどの飲み物を配る活動があった。列に並んだ人たちの中には、ホームレスの人たちだけでなく、ドイツからのバックパッカーの青年も混じっていたのが印象的だった。それ以外にも、地域の施設に必要なものを尋ねて、各家庭から寄付を集め、その品をクリスマスにプレゼントする活動なども習慣化しているようだった。

## (3) Mt Alvernia 校の卒業式典

11 月 14 日には、Padua College の礼拝堂で夕方から卒業ミサが行われた。卒業生は家族と共にやって来て、それぞれ好きな席にすわり、名前を呼ばれると、祭壇の前に集合する。ミサが始まり、Kerrie

校長先生と生徒のスピーチがあり、ミサが終わると、卒業生たちはランタンを手にして退場して行く。とても幻想的な式だった。教員・卒業生・在校生・保護者で座席を分けていないことが、和やかな雰囲気を作り上げているように感じられた。

その後、Padua College の体育館に移動して、卒業晩餐会が始まった。飾りつけをした体育館内には、12 人掛けの丸テーブルがいくつも用意されていた。卒業生と家族が同じテーブルに座って、ビュッフェ形式の食事を楽しむ。Mt Alvernia 校にはハウスと呼ばれる数種類の活動グループがあり、生徒は全員がどこかのハウスに所属している。卒業生はハウスごとに Kerrie 校長先生から卒業記念指輪と卒業証書を手渡され、優秀な成績を修めた卒業生の表彰や、ハウスの代表者によるスピーチがあった。Year 10 と Year 11 の生徒たちは、このディナーで給仕を務めていた。1、2 年後、自分たちが主役となるためのために、観察しておくのだ。

翌々日の 1 限目の HR の時間は、生徒たちが朝食やお菓子、ジュースなどをテーブルに用意していた。クラスは学年縦割りなので、最年長になった Year 11 が準備をすることになっている。クラスごとに楽しく会食したあと、体育館で全校集会があった。卒業生とともに保護者もやって来て、保護者は体育館のギャラリーに座り、生徒はフロアの椅子に座った。そして、ハウスごとに新しいキャプテンの任命式が行われた。ハウスには、スポーツ、カルチャー、ヘルスなどの分野がある。それぞれのキャプテンをしていた卒業生から新キャプテンへとハウス旗が引き継がれ、スピーチが行われた。これで卒業生はすべてを在校生に引き渡し、Year 11 が最年長学年になったわけだ。その後、卒業生たちは後輩が並ぶ列の中を祝福されながら退場し、中庭まで来ると円陣を組み、全員で帽子を空高く投げ上げて卒業を祝い、再び後輩が並ぶ列の中を通過して校門へと進んで行った。

## (4) 「日本語」の授業

研修校には選択科目として「日本語」があり、専任の先生もいらっしゃるの、授業では ALT としての活動が中心となった。Mt Alvernia 校で日本語を担当するのは Victoria 先生で、彼女は日本への留学経験もあり、柔道二段で、日本文化や流行に

もとても詳しい。「日本語」を週16時間担当し、それ以外にも担任業務などもおもちだった。

ブリスベンでは水不足が大きな社会問題となっている。「日本語」クラスでも、「水の節約」をテーマに日本語作文、スピーチをさせていた。

Hillbrook 校の「日本語」担当は、Margaret 先生と Kristin 先生の2人である。教員準備室はイタリア語とフランス語の先生と同じ部屋だった。授業では、教科書やワークブック、プリントを使用する頻度が高く、Mt Alvernia 校と比べると、漢字やカタカナの書き方にも多くの時間が割かれていた。

#### (5) Hillbrook 校での「英語」の授業観察

Lis 先生の「英語」の授業では、映画の予告編のように、自分が読んだ本の trailer を生徒に制作させる授業を観察した。1回目の授業では、昨年度の生徒作品を見たあと、図書室で読書指導があり、1年間でたくさん本を読んだ生徒は表彰された。後日、生徒が trailer を撮影しているところも見学した。自由読書後の活動が、読書感想文に代表される文字を使ったメディアから、映画に象徴される映像メディアへと拡大しているようだ。Mt Alvernia 校でもそうだが、校内では Wi-Fi が使え、生徒は全員 iPad かポータブル・コンピュータを1台ずつもち歩き、授業でも活用している。映画・映像表現は必須の学習課題となっているように感じた。

Debbie 先生の「英語」では、生徒に短編小説を創作させる授業、Catie 先生のクラスでは、自分が読んだ本について、キーになるアイテムを持参してプレゼンテーションをする授業が行われていた。ここでは生徒の *Romeo and Juliet* のプレゼンテーションを観察した。また、小説の内容を絵画で表現し、新しいブックカバーやポスターを作成する授業も行われていた。

#### (6) Hillbrook 校での課外活動

Margaret 先生が企画して、日本食の夕食会があった。生徒は保護者、兄弟姉妹と同伴で、夕方ブリスベン市内のレストラン Little Tokyo へ集まり、畳敷きの大広間で100人ほどが会食した。日本文化学習の一環として、独自に行われているらしい。希望者が自己負担で参加するのだが、このような企画も学校としてではなく、教科として自由に行ってい

た。

また、毎年9月に2週間ほどの日本研修旅行を企画するのも、学校ではなく教科である。イタリア語選択者のイタリア旅行、フランス語選択者のフランス旅行などは、教科の先生が独自に企画して実施している。希望者参加なので、何年生で参加するかは本人と家庭しだいである。このやり方は Mt Alvernia 校でも同じで、外国語教育としては理想的ではないだろうか。

## 4. 研修内容Ⅱ(第1学期1～2月)

### (1) 新学期の始まり

Mt Alvernia 校の新学期は1月28日に始まった。この日には、新入生も含め生徒全員が体育館に集合して Senior Badge Ceremony があった。これは入学式ではなく、これから1年間学校の中心として活躍することになる Year 12 に、最上級生としての自覚を促すための式であった。

Hillbrook 校では、登校時に先生方が校舎入り口で新入生を待ち構えていた。新入生一人ひとりに名前を尋ね、名簿でクラスを確かめ、クラスごとに異なる色のシールに名前を書いて、それを本人に渡していく。これがクラス発表だった。校舎に一覧表を貼り出すということはなかった。新入生はいったん体育館に集合し、諸連絡のあと各 HR へ移動して生徒手帳などの書類を受け取る。その後、上級生のスポーツ委員が教室にやってきて、水泳大会準備のために新入生の泳力調査があった。そのあとは、クラス内で新入生どうしの懇親ゲームがあり、morning tea のあとまで続いた。昼食後に再び体育館に集合し、ここでスクールバッチ贈呈式があった。新入生と在校生がペアになり、ペアごとに在校生から新入生へとバッチを渡していった。

### (2) Mt Alvernia 校での「日本の近代化」についての授業

Luke 先生から、明治時代の日本の急激な近代化について話してくれないか、という依頼があった。打ち合わせをしてみると、黒船が来るまでは侍が国を治めていた日本が、わずか50年でロシアとの戦争に勝利するほどまで近代化できたのはどうしてかを知りたい、というものだった。彼らにとって江戸時代の日本といえば侍、忍者、和服、刀というイメ

ージが強く、ロシアといえばナポレオン軍さえ打ち負かしたヨーロッパの大国というイメージだ。

これは今回のサバティカル研修で行った授業の中で、最も難しい課題であり、それゆえ最も興味深い課題でもあった。下調べでは、まず生徒たちが日本の近代史をどのように習っているかを知るため、図書館で世界史の教科書を借りて、日本について書かれている部分を読んだ。次にインターネットも利用して、日本からの視点と海外からの視点の違いについて考えた。時間と根気を要する作業だったが、日本の歴史を見直す機会になった。オーストラリアの学校で教えることで、自分自身が自国について深く学ぶことができた。授業では、50分を十分に使って話したが、言い足りないこともたくさん残った。

### (3) ネイティブに「英語」を教える

Mt Alvernia 校の Greg 先生から「5 文型と動詞の種類」について、生徒に授業をしてもらえないかと依頼された。驚きである。先生方によると、現在の生徒はカリキュラム上、いわゆる「英文法」を小学校で習わなかった世代で、そのことが母語である英語習得の過程でも、あまりよい結果を生んでいないとのことだった。私は外国人なので「英文法」自体を教えるにはふさわしくないだろうが、日本で「英文法」がどのように教えられているかを説明することなら可能ですよ、ということで引き受けた。この授業もまた私にとって、たいへん貴重な経験となった。

また、Marisa 先生の「英語」の授業では、「物語文の分析」「ショートストーリーを書かせる」「段落の作り方」「新聞の段落構成の特徴と読み方」などの授業をひとりで担当し、生徒が提出した作文の添削と誤答分析も行うことができた。私は英語教師なのでこのような授業には慣れているが、生徒たちは外国人の私から母語(英語)を教わることについてどう思うだろうと懸念した。しかし、実際に授業をしてみると、生徒たちは普段と変わることなく授業を受けてくれた。

Karen 先生の「英語」の授業では、*Of Mice and Men* を読んでいた。この作品は私もよく知っているので、Karen 先生ともいくつかの意見を交換した。オーストラリアにいる間、人々が Aussie English に強い誇りと愛着をもって感じられ

る場面によく出くわした。しかし、学校に「国語」という科目はなく、あるのは「英語」である。それゆえ、アメリカ文学であれイギリス文学であれ、「英語」で書かれていれば題材として扱われる。学校で学ぶのが「国語」でなく「英語」なので、外国人の私が教えても気にならないのかもしれない。

### (4) 授業観察

Mt Alvernia 校では、global studies の授業で、中世ヨーロッパにおけるカソリック教会の支配についての授業を観察した。オーストラリアの歴史には、もちろん中世はない。彼らの感じ方としては、建国以前の歴史はヨーロッパ史とつながっているようだった。この点も、私には馴染みにくいところであった。

Hillbrook 校で「日本語」を担当している Kristin 先生は、「演劇」の授業も担当しておられる。授業では状況設定をした上で、生徒にその場で即興で演技をさせていた。言葉以外の手段でも、自己を表現する練習をさせているようだった。

### (5) 学校外活動の観察と研修終了

2月16日、ライオンズクラブ主催のスピーチコンテストに生徒が参加するので、先生方と共に出かけた。Mt Alvernia 校から2名、Padua 校から2名、それ以外の学校から1名が参加していた。生徒はまず、テーマに関する2つの質問に対してその場で自分の考えを述べ、次に自分で用意してきたスピーチをした。その場で考えてスピーチをするというのは、実践的で面白い方法だと思った。コンテストでは Mt Alvernia 校の生徒が最優秀賞を勝ち取った。

4か月間のオーストラリアでの研修は2月28日で最後となった。この後、最後の研修地となるニュージーランドの首都ウェリントンに移動した。ウェリントンでの最後の1か月の研修についても、機会があればあらためてご報告したい。

ところで、半年後の2014年9月には、Mt Alvernia 校と Hillbrook 校の「日本語」選択の生徒たちが、研修旅行で京都にやって来た。先生方とも再会を果たし、現在は授業での交流を計画中である。